

〔書評〕

ロバート・キヨサキ＋シャロン・レクター 『金持ち父さん 貧乏父さん』

(白根美保子訳 筑摩書房 2000年)

池野重男

昨(12)年度の講義のひとつ「現代経営入門Ⅰ」のレポートの「最近の読書」で、かなりの学生が本書を読んでいることを知った。この本のことは以前にマスコミで話題になったこともあって私も手に取ったこともあったのだが、その内容の貧しさに呆れて買うことはなかった。が、今回、多くの学生たちが読んでいる¹⁾ことを知って(本学図書館にある二冊はともに貸出中だった!)、職業義務として(!?)読んだ。

以下では、本書を私が初めに読もうとしなかった理由を点検する形で書評してみたい。

本書を開くと、シャロン・レクター氏が「いま子供たちに必要なこと」として推薦文のようなものを書いている。氏は、共著者のロバート・キヨサキ氏が開発中だった教育用の新製品「キャッシュフロー」使った自分の娘の、次のような言葉を掲げる――

安定しているからとか、福利厚生がしっかりしているからとか、給料がいいからといった理由ではなく、自分がやりたいからという理由で仕事を探していいんだということがよくわかったわ。このゲームが教えてくれたことをしっかりマスターできれば、会社

1) 次のようなレポートがあった――

中学生の頃、自宅にこの本があったので一度読んだことがあり、「キャッシュフロー」の子供向けボードゲームを家族でやったことがあります。このゲームでお金の動き方や不労所得のことがよく分かりました。

私はお金持ちになることに関心があったので、この本の内容はとて面白く感じました。が、それ以上に今後の為になるものだと感じた。

私は家にこの本があったので全部読んだことがある。タイトルや教えに対する例はお金持ちになるためのものばかり書かれていますが、教え自体や例の一部分を個々に取り出して考えてみると、人生とまでは言わなくともいろいろなものの考え方としては役に立てることができると思いました。

私は一年前に知り合いの勧めでこの本を読み、感心したのを憶えています。子供の頃から「一生懸命まじめに働けば人はちゃんとみてくれる」という価値観を教わりましたが、実社会では「働けど働けど、暮らしは楽にならない」という人がたくさんいます。人はみてるだけです。

が必要としている技術を身につけるために何かを学ぶのではなく、自分が学びたいことを自由に学ぶことができると思う。クラスメートの大部分はもうすでに、安定した仕事を持つことや社会保障について心配し始めているけれど、これをマスターすればそんなこと心配しなくてすむと思うわ

p. 15

多くの人は、自分の娘（あるいは息子）がもし早々と「安定した仕事を持つことや社会保障について……そんなこと心配しなくてすむ」と言えば、おそらく落ち着かない、というか不思議な気がするだろう。じつは、これこそが本書の結論なのである。が、あまり先を急がずに、本書の紹介を続けよう。

世の中には二つのルールがある。金持ちが使っているルールと、残りの九十五パーセント²⁾の人が使っているもう一つのルールだ。

p. 18

この認識は正しいし、私も共有する。しかし、その認識が、自分は「金持ちが使っているルール」で生きていくのだから、「残りの九十五パーセントの人が使っているもう一つのルール」なんてどうでもいいという姿勢に繋がるのなら、私はとてもその認識を共有できない。そして、本書はそれを勧めるのである。私が本書を店頭で並べられていた時に手を取りながらも読もうとしなかったのは、じつはここに理由があったのだ。

さらに、シャロン・レクター氏は言う――

会社勤めをするよう子供を励ますことは、ろくな年金プランもないまま、自分のためよりもむしろ税金のために一生働くよう勧めるのと同じことだ。税金が私たちにとって最大の支出だ……母親として、公認会計士として、私は「いい成績をとっていい仕事を見つけた」という考えはもう時代遅れだと確信している。いまの子供にはもっと新しい時代にあった、洗練されたアドバイスが必要だ。……自己資金で会社を興すための努力をするよう子供たちに教える

p. 21

じつは、後にロバート・キヨサキ氏が言うのだが、「いい成績どころか」「学校」なんてどうでもいいことになる。なにせ、ロバート・キヨサキ氏が尊敬する「マスターの父親 [=「金持ち父さん」] は十三歳で学校をやめた。いまその人が、自分より多くの教育を受けた人たちに命令や指示をくだし、次々と質問を浴びせる。……その人が一声かければだれもが飛んで来て、文句を言われるとちぢみあがるのだ」(p. 107) から。

もうひとつ、ロバート・キヨサキ氏が「現在の学校教育がばかげていると思う理由」と

2) 今日の全米各地で繰り広げられている「ウォール街を占拠せよ」デモでは、「九十九パーセント」と「一パーセント」という数字が謳われている。アメリカの富の四〇%を所有するのが人口のわずか一パーセントであることを思うと、本書で使われている「九十五パーセント」という数字でも控え目である。

して掲げるのは、「まちがえるのは悪いことだと教えられ、まちがえると罰を受ける。だが、実際に人間がどのように学ぶかを考えてみれば、人間はまちがえることで学ぶ。私たちはころびながら歩くことを学ぶ。もし、まったくころばなければ、歩くことはできないだろう。自転車の乗り方を習うのも同じだ。」ということである。ここまでは私も共感する。その通りだ。

が、だからといって、この後に続く次のようなもの言いは論理的にも正しくない――

金持ちになるのも同じだ。残念ながら、大部分の人が金持ちでないのは、みな損するのを恐れているからだ。勝者は負けを恐れないが、敗者は負けを恐れる。失敗は成功に至るプロセスだ。失敗を避ける人は成功も避けている。

私はお金のゲームもテニスの試合と同じようなものだと思っている。一生懸命プレーし、ミスをし、それを直す。そして、さらにまたミスをして、またそれを直す。それを繰り返すうちにうまくなっていくのだ。そしてたとえ負けても、試合をしたあとはネットに近づき、相手のプレーヤーと握手を交わし「また来週の土曜日に」と言う³⁾。

pp. 176~177

たしかに、「失敗を避ける人は成功も避けている」。おそらく、それ自体は正しい⁴⁾が、それは、宝くじに当たらない人は宝くじを買わないからだと言うのと同じで意味はない。宝くじを買えない人、経済的に余裕のない人に向かってこのように言うのは論理的に間違っている。だから、「テニスの試合」では「ミスをし、それを直す。そして、さらにまたミスをして、またそれを直す。それを繰り返すうちにうまくなっていくのだ」が、しかし、投資はそうはいかない。まずもって初めの金がない人には、投資、つまり「テニスの試合」はできないし、だから、試合後に「握手を交わし『また来週の土曜日に』と言う」こともできないのである。経済的に余裕のある人だけが、投資で「ミスをし、それを直す。そして、さらにまたミスをして、またそれを直す。それを繰り返すうちにうまくなっていくの

3) 同じことを、本書の「実践の書」という第2部では次のようにも言う――「損をするのが怖いのはあたりまえだ。その恐怖はだれもが持っている。……金持ちと貧乏人のあいだの大きな違いは、この恐怖をどのように処理するかにある。」(p. 204)・「たいていのお金をお金損するのが怖くて……あまりに安全第一にしすぎるし、考え方が小さすぎる。大きな家や大きな車は買うくせに、大きな投資はしようとしな。アメリカの国民の九十パーセントが金銭的な問題を抱えている理由は、勝とうとせずに、損をしないことしか考えていないことだ。」(p. 210)・「もし金持ちになりたいという気がすこしでもあるのなら……たくさんの卵をごく少ない数の籠に入れる。これが秘訣だ。……わずかな卵をいくつもの籠に分けて入れるというのではだめなのだ。」(p. 211)

4) だから、学生のレポートに次のようなものがあつた――

「勝者は負けを恐れない」と書いてあつて、なるほどなと思ひました。テニスの例でもあるように、たとえ負けても失敗しても、まだチャンスはあるし、それを繰り返さないと上手くならないという話なので、これからはいろいろなことに挑戦していこうかなと思ひました。

だ。」そして、ますます「もっと投機性の高い投資に目を向ける余裕ができ」(p. 115)、大金を稼ぐことができるのである。

ロバート・キヨサキ氏も、このようにできるのは「ほんの一握りの人間」だということを知っている(先に「金持ちが使っているルール」は「残りの九十五パーセントの人」のそれとは違うと言ったのと同じ)。論理的にそのことを否定できないことは、氏自身も分かっているのである。しかし、それでは多くの人に説得力を欠けることは明らかなので、氏は他方で「信じられないほどの大金持ちになっていく……そんな話はあちこちころがっている」と強がってみせる。

その曖昧な物言いを以下に示しておこう――

情報時代のいま、お金は爆発的に増える。ほんの一握りの人間が、まったく何もないところから、アイデアと「同意」だけを武器に信じられないほどの大金持ちになっていく。株などの投資で生計を立てている人たちに聞いてみれば、「そんな話はあちこちころがっている」と教えてくれるだろう。……「同意」……たとえば、株式取引所で交わされる手サイン、リスボンの業者のコンピュータ画面とトロントの業者のコンピュータ画面のあいだで交わされる売買指示の信号、秒きざみで売買を指示するブローカーへの電話……こういった実体のないものからお金が作られている。お金が実際に動いたのではなく、「同意」が動き回ったにすぎない。

p. 160

よく読めば、「信じられないほどの大金持ちになっていく……そんな話はあちこちころがっている」というのは、「株などの投資で生計を立てている人たち」のなかでの話なのである。

いまや、先のシャロン・レクター氏の娘の言葉が明らかだろう。政府に払う「税金」は「私たちにとって最大の支出」であるという認識⁵⁾は、カレル・ヴァン・ウォルフレン『アメリカとともに沈みゆく自由世界』(井上実訳 徳間文庫 12年)が言う「アメリカ的リバータリアニズム」である。「三世代にわたって若者たちに対して、なりふりかまわず金を稼ぐことは問題がないどころか、誰もが成し遂げるべき神聖なる目標であるかのごとく説き続けた、並外れてロマンティックな人物……一九二六年、二歳で樹立されてまもない共産主義政権下のロシアからアメリカに逃れたアイン・ランド」の小説について、次のように言う――

アメリカの文学史上、利己主義をあからさまに称えた作品……発表されるとたちまちミ

5) 税に対する著者の恨みの強さは、「私 [ロバート・キヨサキ氏] の妻の両親……の家にかかる固定資産税 [が] ……月額にして千ドルを越え……引退前だったので……結局二人はやむなく家を手放した」(p. 111) という身近な体験に裏打ちされている。が、それにしても、「月額にして千ドルを越え」る固定資産税 (1ドル=100円として月額10万円) がかかる「家」とはどんな大きさだったのだろうか。そこまで書いてあれば、私たちにも税の重さの比較は可能なのだが。

リオンセラーとなった（いまなお毎年五〇万部ほど売れ続けている）。その結果、彼女の思想を受け継ぐ信奉者グループが形成され、一九八二年の彼女の死後も、その教えを広めている……ランドは産業界の頭目たちを、社会で道義的に優れた人物として描き出し、貧困層や労働者階級に対して横柄な態度をとるよう奨励しているのである。

彼女はアメリカに昔から存在していた、文明を高めるためにみずからの才能と努力を惜しみなく注ぐ雇用者とうらはらに、貧しい人は努力もせず、社会にもなんら貢献しなかったのだから、貧困は自分の責任だという視点を誇張してみせた。社会の不正を正そうとするいかなる政府の努力も、社会の不公平を是正するためのどんな公的プログラムも、また自分たちに都合のいいやり方という自由を阻むいかなる規制をもはっきりと拒絶したランドは、アメリカのリバタリアニズム（注：他者の権利を侵害しないかぎり、個人の自由を最大限に尊重すべきだとする思想）の極端な提唱者であった。……レーガノミックスとサッチャリズムはその点、彼女が理想とする空想世界に合致するものであった。

pp. 331～333

まさに本書は、先に見たようにウォルフレン氏がランドについて述べた、「文明を高めるためにみずからの才能と努力を惜しみなく注ぐ雇用者」と「努力もせず、社会にもなんら貢献しな」い「貧しい人」という認識⁶⁾で書かれたものである。だからこそ、「税金が私たちにとって最大の〔無駄な〕支出だ」と、シャロン・レクター氏は、そしてもうひとりの著者ロバート・キヨサキ氏も言うのである。

本書がかつて一大ブームとなって店頭と並べられていたと先に私は書いたが、じつは今でも本書は売れ続けている。日本経済新聞の日曜版「ビジネス書ランキング」には東京・ジュンク堂池袋本店での売り上げ上位書籍が掲載されているが、2月11日～17日には『金持ち父さん 貧乏父さん』が第5位、その前の週には第7位とある（同紙13年2月24日付）から、出版されて13年になる今日に至ってもなかなかの売れ筋商品であることがわかる。また、本書にとどまらず、店頭にはこの種のもものが並んでいて、投資・金儲けへの強烈な志向が露出している。たとえば、「富裕層のカネと知恵」が「特集」されている『週刊ダイヤモンド』12年10月20日号には、会員権の価格（年間24泊タイプ）だけで高級スイートだと4000万円を超える完全会員制高級ホテルの会員数が1万4000人（p. 31）とか、「29歳にして“月収1億円”」・『『40万円の安物ですが』というスーツに身を包み』、「飲み代など

6) カレル・ヴァン・ウォルフレン氏は最近の『日本を追い込む5つの罠』（井上実訳 角川書店 12年）では次のように述べている――

アメリカの一般の人々は国家とは必要悪であるか、少なくともきわめて疑わしいものだと教え込まれてきたわけだが、誤った道理をさかんに喧伝するプロパガンダ攻勢は、彼らにみずからが重んじてきたはずの個人の自由を、真っ向から立ちほだかのような思想を植えつけた。

アメリカの富の四〇パーセントほどを所有する人口のわずかパーセントの人々は、中産階級には努力が足りないとしており、そのような人々が甘やかされる状況を続けたいなどはまったく望んでいない。

で1日に使うお金は平均100万円・「月額家賃は250万円、敷金は2000万円」の六本木最高級タワー型マンションに住み、「最愛の恋人には会社を一つまかせている」(pp. 38~39) 起業家などが紹介されている。さらに、「自宅がなんと25軒、800ヘクタール(東京ドーム170個分)を所有する世界レベルのウルトラ大富豪！」(p. 76)が、その著書『大富豪アニキの教え』(ダイヤモンド社 12年)とともに紹介されている。じつは、この本も私は店頭に並んでいるのを見た。

さらに、本稿との関連で言えば、小暮太一『僕たちはいつまでこんな働き方を続けるのか?』(星海社新書)が、朝日新聞12年6月24日「売れてる本」(5刷 5万部)として、速水健朗「所得だけでは裕福にはなれぬ」によって書評されているが、なんと、そのなかに『金持ち父さん 貧乏父さん』が「ロングセラー本」として紹介されている――

会社を辞めたい若いビジネス層向けのビジネス書は、キャリアアップやパーソナルブランディングなどを煽り続けている。

若年層の労働環境悪化は非正規問題やロスジェネ問題などとして取り上げられる機会も多いが、本書はそれらとはまったく違った角度で切り込んでいく。

著者は、日本企業が採用する「必要経費方式」の給与は、「明日も同じ仕事をするために必要な分」を支払う仕組みだという。つまりは、飯を食い、寝て、毎日服を着替える。そういったための最低限の費用として賃金は与えられるのだ。

そうであるならファストフードやユニクロがある現代で、給与が下がるのは当然のこと。しかも、キャリアアップなどは無意味ということになる。

驚きの論理だが、これは著者の妄想ではなく、かつてマルクスが示した賃金の仕組みである。本書は同時にロバート・キヨサキの『金持ち父さん 貧乏父さん』を引き合いに出す。このロングセラー本を要約すると、給与労働で人は金持ちになれず、不労所得が必要というもの。

著者は、マルクスと金持ち父さんが同じことを言っていると指摘する。フロー(所得)とストック(資産)、前者だけでは人は裕福にはなれないのだ。逆に言えば、いかに後者を築けるかが問題になるのだ。著者は、会社で働きながら、自分の「労働力の価値」を「積み上げ」ていく働き方を提唱する。精神論のようだが、あくまで経済学の論理をもって導き出されていくので説得力がある。

見立てはアクロバチックながら論理はスマート。一時のカンフル剤ではなく、読書が資産となる一冊である。

私は、速水氏のように本書を「論理はスマート。一時のカンフル剤ではなく、読書が資産となる一冊である」と到底絶賛できない。そのことは、これまでの私の書評からも理解してもらえらるだろう。この違いは、新自由主義に対する評価・立場の違いだろう。たとえば、速水健朗『都市と消費とディズニーの夢——ショッピングモライゼーションの時代』(角川書店 12年)は、「競争原理を導入し、公共的なスペースが最大限有効活用されると

いう「[都市の] 変化」=「“新自由主義的な街の変化”」(p. 52) = 「都市の民営化」= 「都市のショッピングモール化」(p. 9) を具体的に展開するものだが、その基本的な姿勢は、「経済効率性や消費社会化によって公共の機能が私的なビジネスの場になることの暴力性について、無批判な姿勢を批判する向きもあるでしょう。しかし、新自由主義や消費社会を端から批判するという姿勢では、いま起こっている事態を理解することすら困難になるでしょう。本書では、その価値判断よりも、現状の描写を優先します」(p. 213) というもので、だからこそ、「“行き過ぎた消費社会”の親玉」として「ショッピングモールのものを批判的に捉える社会学者……の論理はまるで、裸の人しかいない国で、ヌードグラビア誌の露出の多さを批判し続けている人の物の言いように思えてなりません。現代社会は消費によってその多くが成立しているにもかかわらず、表層部分だけを問題にしてしまっている感じがします」(pp. 56~57) と批判者とその論理を切り捨てる。こうした速水氏の論理とそれへの批判について詳しくはここで展開できないが、現状を前提にしないと論理展開できないということと、それを肯定・受容することとはまったく別の次元の話である、ということだけを指摘しておく。

話を元に戻す。本書はそのタイトルにあるように、ロバート・キヨサキ氏には事業家の「金持ち父さん」と勤め人の「貧乏父さん」がいて、それぞれが違うことを著者に教えたという形で話が進められる。

「金持ちがさらに金持ちになり、貧乏人がさらに貧乏にな……る理由の一つは、お金に関する教育が学校ではなく家庭で行なわれるからだ」と、格差のすべての責任は家庭にあると考える⁷⁾ 著者は、貧乏な親は子供に「学校に行って一生懸命勉強しなさい」と言うだけで、これだと、たしかに「子供はいい成績で学校を卒業するかもしれないが、頭に入っているお金にかんする知識は貧乏な親から教えてもらったものだけだ」(p. 27) から、「金持ちはお金に困っている人を助けるためにもっと税金を払うべきだ」と考える貧しい家庭の父が教える考えで育つ。それに対して、金持ちの父の家庭では、「税金は生産する者を罰し、生産しない者に褒美をやるためのものだ」(p. 29) という考え⁸⁾ で教育される。

ここにあるのは、先に見た新自由主義の考えこそが正しいという著者の立場の確認である。この確認は、著者が子どもの時に「金持ち父さん」に時給10セントのアルバイトとし

7) 「貧乏や金詰りの一番の原因は国の経済や政府、金持ち連中のせいなんかではなく、[貧しい人たちが持つ] 恐怖と無知だ。」(p. 74) ・「多くのお金に困った状態から抜け出せず、安全策しかとれない大きな理由は、疑いの気持ちと臆病風のせいだ」(p. 217) ・「私たちが将来金持ちになるか貧乏になるか、あるいは中流のままで終わるか、その道を選択する力は私たちの手の中にある。たとえわずかでもお金を手にするたび、私たちはこの力を手にしている。金持ちになれるかどうかは、そのお金をどう使うかにかかっている。」(p. 236)

8) 「十歳頃から私は、金持ち父さんからは『政府で働いている人たちは怠け者の泥棒だ』と聞かされ、貧乏父さんからは『金持ちは欲の皮のつばった詐欺師だ。もっと税金を払わせるべきだ』と聞かされた。」(p. 134) ・「私が自分の個人的な収入を最低限に抑えているのは、政府にとられなくないからだ。……資産からの私の収入がネバダにある会社を通して支払われている理由はここにある。私がお金のために働いていたら、政府にごっそり持っていかれる。」(p. 249)

て雇われた時に文句を言った体験からもなされる——，

「きみはものの見方を変えなくちゃだめだよ。つまり問題なのは私だといって私を責めるのをやめるんだ。私が問題なんだと思っていたら、私を変えなければそれは解決しない。もし、自分自身が問題なんだと気づけば、自分のことなら変えられるし、何かを学んでより賢くなることもできる。たいていの人が自分以外の人間を変えたいと思う。でも、よく覚えておくんだ。ほかのだれを変えることより、自分を変えることのほうがずっと簡単なんだ」⁹⁾

p. 55

「時給十セントで働くことにきみが腹を立ててくれてよかった……本当に何かを学ぶためには、たくさんのエネルギー、情熱、どうしても知りたいという欲望がないとだめなんだ。怒りも原動力の一つになる。情熱は怒りと愛が合わさったものなんだから。お金のこととなると、たいていの人は安全そうなことだけやって安心していたいと思う。つまりそこには情熱はない。そういう人は恐怖に動かされているんだ」

「給料の安い仕事でもやろうという人がいるのは、そのためなんですか？」

「そうだよ。うちではサトウキビ農園や政府の役所ほどたくさんの給料を出していない。そのために、私がみんなを搾取していると言う人もいるけれど、私に言わせれば、みんなは私にではなく自分自身に搾取されているんだ。原因は自分の恐怖で、私のじゃない」

「でも、あなたはもっとたくさん払うべきだとは思わないんですか？」

「そうしなきゃいけない理由はないからね。それに給料を上げたって問題の解決にはならない。きみのお父さん〔貧乏父さん〕を見てごらん。高い給料をもらっているのに、請求書の支払いに困っているじゃないか。たいていの人はお金をたくさんもらっても、請求書の数が増えるだけなんだ」

pp. 57～58

「でも、マーチンさんや……みんな一生懸命働いているんです。あなたはそういう人たちをばかにしているんですか？」

金持ち父さんは笑顔で答えた。

9) 学生はここに感動してしまう——，

個々に取り出して考えてみると、人生とまでは言わなくともいろいろなものの考え方としては役に立てることができると思いました。例えば……「自分自身が問題なんだと気づけば、何かを学んで賢くなることもできる。」「自分を変えるほうがずっと簡単なんだ。」という文は、何かのミスがあった時に自分の何が悪いのか、どうしたら解決できるのか等、考える習慣が身に付くようになる。これらは日常にも関係してくるものである。

良いことが書いてあるなど思ったのが、ものの見方を変えるということ……自分自身が問題ということは自分がなにか間違っているということで、それを他のせいにしてしまうと責任転嫁になってしまう。

「……とんでもない。……きみたちにはもの見方を広げて……ほしいんだよ。たいいていの人にはもの見方がせまくてそれを見ることができない。みんな自分がはまっている罫が見えないんだよ」

p. 65

たしかに「ほかのだれを変えることより、自分を変えることのほうがずっと簡単なんだ」というのは、それ自体正しい。しかし、もっと正確に「ほかのだれかを批判するより、そんな自分が我慢すべきなんだ」と金持ち父さんが言っているのだ、と理解すべきなのだ。著者にすれば、それこそ「貧しい父さん」の発想¹⁰⁾だ、と切り捨てるだけだろう。

そんな「金持ち父さん」に忠実な著者は、そこから学んで小さいながらも事業を起こして金儲けをする喜びを発見する――

[土曜ごとに働いていたコンビニで] 漫画雑誌の表紙を半分だけ切り取り……切り取った半分だけをとっておき、雑誌そのものは大きな段ボール箱の中に放り込んで……切り取った表紙の半分は新しい雑誌を届けに来た卸業者に、小売しなかった証拠に戻す……まもなくやってきた業者の人に私は表紙を半分切られた漫画雑誌をもらうわけにはいかないだろうかとたずねた。その男の人は「きみたちがこの店で働くことと、雑誌を転売しないことを約束してくればいいよ」と答えた。

[友達のマイクと二人でこうして] 毎週手に入る漫画雑誌 [で]……「漫画図書館」[を作り] ……マイクの妹を図書館長として雇った。館長は毎日学校が終わったあと、二時半から四時半まで……開館し、入場料として一人につき十セント徴収……平均して週九・五ドルの収入 [があり、そこから] ……マイクの妹に週一ドルを払い [八・五ドルを儲けた]

pp. 84～85

著者が得たのは、単に儲けだけではなかった――「漫画図書館のアイデアの中で一番よかったことは、私たちが実際にその場になくてもその事業自体がお金を生み出してくれたことだ。お金が私たちのために働いてくれた」(p. 86)、と。つまり、自分は働かずとも金儲けができるということの素晴らしさを学んだ、と。子どもの金銭リテラシー教育の輝かしい成果なのだ！ というわけである。しかし、私はもっと他に子どもはすることがあるはずだと考えるのだが、それは著者からすれば「貧しい父さん」の考えでしかないのだろうし、だからこそ貧困が連鎖して子どもが可愛そうな存在になるのだ、と言うのだろう。

ロバート・キヨサキ氏が崇める「金持ち父さん」の経歴と、氏自身のそれが次のように

10) 自業自得論も展開される――「現在、経済的な苦境に悩む人……の中には、昔の考え方に固執しているというだけの理由でそうなっている人がおおぜいいる。このような人たちは、何もかも昔のままであってほしいと望む。つまり、変化に抵抗するのだ。仕事や家を失いかけて、それを技術革新のせいや、不況、あるいは経営者のせいにしてている人が私の知っている人の中に何人もいる。彼らの不幸は、自分自身が問題なのかもしれないと気づいていないことだ。」(pp. 152～153)

示される——，

一九六九年に……合衆国商船アカデミーを卒業……スタンダード石油に就職……オイルタンカーの三等航海士……残業を入れて年間四万二千ドル……年に七カ月だけ働いてあとの五ヶ月は休暇……そうしたければ、五ヶ月の休暇を取る代わりに、子会社の船にのってベトナムに行けば簡単に給料を倍にすることもできた。……この仕事を辞め、海兵隊に入って飛行機の操縦を習った。……本当は軍隊での指揮のやり方からリーダーシップを学びたかったからだ。金持ち父さんは、会社を経営するにあたって一番むずかしいのは従業員を管理することだと私に教えてくれた。

金持ち父さんには三年間の陸軍経験があった。実の父〔貧乏父さんのこと〕の方は徴兵を免除されていた。……

一九七三年にベトナムから帰国後、私は海兵隊を辞めた。それから、ゼロックスで仕事を見つけた。……理由はたった一つ……アメリカで最も優れたセールス・トレーニング・プログラムがあったことだ。……

一九七七年に私は一つめの会社を設立し……「マジックテープ付きの財布」は極東で製造し、ニューヨークにある……倉庫へ運んだ。……金持ち父さんは、失敗するなら三十前がいいと考えていた。「まだ立ち直る時間があるから」

pp. 185～189

こうした経歴のなかからロバート・キヨサキ氏が学んだのは、「マネージメントに関してよく言われる言葉」、つまり「『従業員は首にならない程度に一生懸命働き、経営者は従業員が辞めない程度に給料を与える』というもの」(p. 189)であった。だから、律儀に働く人間への評価は次のような見下しに至る——，

そんなことだから、働いている人の大部分が前に進むことができないでいるのだ。彼らは教えられてきた通りのことしかしない。つまり、「安定した仕事を見つける」ことだけを考える。たいていの人は給料と、退職金や年金など、会社から与えられる恩典のために働く。

p. 190

そして、たとえば「恩典」の一つ、年金はというと、じつに危ういものでしかない、とロバート・キヨサキ氏は嘆い、「会社に雇われている人たちは、将来のことをきちんと考えているのだろうか」と言う——，

米国定年退職者協会の前委員長……によると、「企業による年金支給制度は混乱をきわめている。まず第一に、現在、企業の五十パーセントは年金制度を導入していない。……残りの五十パーセントのうち七十五から八十パーセントの企業が、毎月の支給額が五十五ドルとか、百五十ドル、あるいは三百ドルといった、実質的効果のまったくない年金制度しか持っていない」

“The Retirement Myth”（定年退職の神話）という著書の中で、クレイグ・S・カーベルは次のように書いている。

「私は全国規模の大きな年金コンサルティング会社の本社を訪ね、企業のトップの人間を相手にぜいたくな退職プランを練ることを専門にやっている役員の一に会った。この女性に、重役室の住人ではないふつうの会社員は、退職後の収入の道としてどんなことが考えられるのかとたずねた。すると、彼女は『それはもうこれしかないでしょう』というように自信に満ちた笑みを浮かべながら、『シルバー・ブレット（銀の弾丸）』と答えた。……『もし、ベビーブーマーが自分に老後を養うお金がないことに気づいたら、いつだって自分の頭に一発お見舞いすればいいってことですよ』と答えた」
……そのほかに、医療費や長期滞在型老人ホームの費用などを入れたら、そこに見えてくる未来は……恐ろしい……

医療を社会化する方向に進んでいる国では、すでに多くの病院が、「誰を生かし、誰を死なせるか」といったきびしい決断をくださなければいけないところまできている。……患者の財産と年齢 [によって] ……

だから私は思うのだ——会社に雇われている人たちは、将来のことをきちんと考えているのだろうか。 p. 192

「金持ち」ではない「九十五パーセントの人が使っているもう一つのルール」がもたらす「未来は……恐ろしい」としたら、それをなんとか変えていかなければいけない——というのが思考の流れだが、先にみたように「自分自身が問題なんだと気づけば、自分のことなら変えられるし、何かを学んでより賢くなることもできる。たいていの人自分以外の人間を変えたいと思う。でも、よく覚えておくんだ。ほかのだれを変えることより、自分を変えることのほうがずっと簡単なんだ」という哲学を死守し、読者にも推奨するロバート・キヨサキ氏には、そうした思考の流れは「貧乏父さん」のものでしかない。

そして、「金持ち父さん」の経営方針が反労働組合となるのは必然である——

金持ち父さん……は、自分の経営する会社に労働組合ができないようにつねに目を光らせていた。労働組合が組織されそうになったことは何度かあったが、金持ち父さんはいつもうまくそれを切りぬけた。 p. 194

ここに示したロバート・キヨサキ氏の文章は、それらを読み飛ばすとすればただそれだけのものだが、しかし、その裏にはどのような凄まじい行為があったのかを読者は想像することもできる。たとえば、クリストファー・ディッキー『『鉄の女』が残した大き過ぎる遺産』（『Newsweek』13年4月23日号）は、労働組合を敵視するメディア王のルパート・マードックは「自分の新聞社を『武装キャンプ』のように経営していた」こと、「非常に残忍で、ストの前線では1人か2人死んでいた」ことを書いている。

労働組合を結成することは、働く人たちの権利なのである。それをロバート・キヨサキ

氏が「経営する会社に労働組合ができないようにつねに目を光らせていた」「金持ち父さん」を尊敬するというのは、どういうことなのかを、読者は考えることもできる。

ロバート・キヨサキ氏が公然と労働組合結成を阻む「金持ち父さん」を支持することができるのは、「民主政治を支えてきたはずの市民の自由は、もはやよりどころとすることができない。……いまだかつてないほどに、将来への不安にさいなまれている。……仕事を失い、これまでなら当たり前だったはずの、困窮者に対する政府の支援も徐々に目減りし……民主主義などまるでたわごとかなにかのようにあつかわれ、片隅においやられてしまった」（カレル・ヴァン・ウォルフレン『日本を追い込む5つの罟』前掲 p.4）今日のありようを、無批判に前提にするどころか、さらに積極的に受け入れるからである。

『「サイテーな自分」なんていない』（『思想運動』12年5月15日号「前照灯」）が描く今日の働く者たちの実状は、次のようなものである――

居酒屋「笑笑」のアルバイトで働く知り合いの二四歳の女性が、やはりアルバイトの副店長の三二歳の男性に、「死ね」と言われて、自殺を企てるということが起きた。その話を聞いた二三歳の男子大学院生が、バイト先の宅配業者「大黒屋」で、日常的に同様の仕打ちを受けていると語った。さらに、回転寿司「スシロー」で、七時間もの長時間、ひたすら軍艦巻きを作り続けるアルバイトをしている男子高校生は、「くたばれ」って言われているけど、と打ち明ける。

大手外食産業に働く若者の多くが、人間としての尊厳を当たり前のように、傷つけられ、抵抗する術もなく、怒りを心の奥底にしまいこむ。「笑笑」は一九八三年設立のモンテローザ系列、「大黒屋」は一九九九年設立のネット注文で拡大の店、「スシロー」は二〇〇八年設立で、回転寿司の新規参入店。それぞれ社員一に対し、その一〇倍のアルバイト従業員で成り立っている。

かれらが語る職場とは、怒号と罵声が乱れ飛ぶ、「クズ野郎」の店長が支配し、差別が日常化した場所であり、「サイテーな人間が集まるサイテーな場」で、そこで働かなければならない「サイテーな自分」を嫌というほど思い知らされるどころだという。

それゆえに、次のようにその文は締める――

アルバイトであれ社員であれ、かれらの労働によって利潤を上げているものの姿を明らかにすること、そのための科学的学習を、かれらに伝えなければならない。

倫理とか道徳の話なんかではない。「九十五パーセントの人」（現実には九十九パーセントの人だが）の側に立たないと社会が成り立たないのである。ロバート・キヨサキ氏やシャロン・レクター、そして「金持ち父さん」が稼ぐ儲けは、じつは「九十五パーセントの人」の生み出した剰余の分け前でしかない。そのことを思えば、「九十五パーセントの人」がどういう状態であるかは他人事ではないのである。

そして、そのことを訳知り顔で、ロバート・キヨサキ氏は次のように「教師」ぶる――

私の一部はたしかに、お金を作るマネーゲームを楽しむ筋金入りの資本主義者だが、それとは別に、私は社会的な責任を担う教師の一面も持っている。教師である私は、「持てる者」と「持たざる者」のあいだのギャップがどんどん広がっていくことを憂えている。私は個人的には、このギャップの広がり大きな原因は時代遅れの教育システムにあると思っている。

p. 200

『持てる者』と『持たざる者』のあいだのギャップがどんどん広がっていくことの原因は社会システムにではなく「時代遅れの教育システムにある」、だから、それを憂うロバート・キヨサキ氏の役割は「社会的な責任を負う教師」として本書を書いて、新時代の生き残りのための手がかりをみんなに知らしめたのだ、というのである。が、ロバート・キヨサキ氏が「教師」として決定的にダメなのは、「世の中には二つのルールがある。金持ちが使っているルールと、残りの九十五パーセントの人が使っているもう一つのルールだ」という氏自身が認める現実のなかで、「九十五パーセントの人」を「金持ちが使っているルール」にすべて乗せることなど不可能だという真理をおろそかにしたことである。

この点をしっかりと見抜いている学生もいる――

気になるのは、この本はあくまで個人が金持ちを目指すためにはどうすればいいのかを語っていますが、その方法が投資に偏っており、まるでゲームの熟練者が素人を市場に呼び込もうとしているかのようです。彼の言う通りに皆が行動すれば、労働者が減り、投資市場の参入者が増え、皆が豊かになるのは難しくなるのではないのでしょうか。皆で一つのパイを喰いあって利潤をとるのが難しくなっては、合成の誤謬です。

だとすれば、「世の中には二つのルールがある。金持ちが使っているルールと、残りの九十五パーセントの人が使っているもう一つのルールだ」という不公平な現実そのもの、つまり不公平を生み出す社会システムを変えることしか途はない。だから、「アルバイトであれ社員であれ、かれらの労働によって利潤を上げているものの姿を明らかにすること、そのための科学的学習」が求められているのである。そして、本書はそれをないがしろにするものである。